

「打聞集」における漢字の用法

東 辻 保 和

はじめに

第一節 漢字と訓との関係

完全付訓漢字の場合

部分付訓漢字の場合

今昔物語彙・高山寺本古往來との比較

第二節 一語多漢字表記の検討

意義用法等の相補関係にある場合

意義用法等の相互に重なり合う関係にあ

る場合

分布状態に注意を要する例

むすび

はじめに

古典保存会複製「打聞集」を底本として、調査したところを述べようと思う。

さて、小林芳規先生は、「高山寺本古往來」に用いられている漢字について、次のように結論づけておられる。

(一) 漢字とその振仮名との間には、和訓の場合、任意でない一定のきまりが窺われる。

(二) 振仮名のない漢字は、原則として上代以来、日本語を漢字で表記する場において用いられた「訓漢字」と一致する。

(三) 振仮名のある漢字には、これとは別に、漢文を理解する場としての訓読の世界に行われてきた習慣を取入れたものがある。

又、峰岸明氏は、同じく「高山寺本古往來」における漢字の用法について、次のように結論づけられた。³⁾

(一) 多くの語について、一語一漢字表記が定着している。

(二) 一語多漢字表記の語にあっては、その用字は、その語の語義・用法の差異と対応している。

(三) そこに使用された漢字は、当時の日常常用漢字の中でも比較的常用性のあるものである。

これらは、いふれも「高山寺本古往來」の漢字の用法に見られる特質と言うべきものであるが、これらの特質が「高山寺本古往來」一個に止るものか、あるいは時代的の普遍相なのかについては、広い調査を必要とするところである。そこで小稿では、「高山寺本古往來」の成立時期に比較的に近い頃の書写と考えられる長承三年栄源筆「打聞集」における漢字の用法の実態を調査し、それに基づいて所見を述べようと思う。

第一節 漢字と訓との関係

漢字には多くの場合、複数の訓が存するが、一文獻において、ある漢字がそのすべての訓に対応して

用いられているということは、普通は有り得ない。そこで本節では、まず漢字と訓との関係を調べてみることにする。(従つて字音との関係は、これを除外する。)

本底本には、「完全付訓漢字」³⁾「部分付訓漢字」及び「全く付訓の無い漢字」が存する。第一に完全付訓漢字はそのまま考察対象となり得る。第二に部分付訓漢字には、捨て仮名・送り仮名・迎え仮名等を施したものが存し、訓を特定し得る例が少くない。第三に全く付訓の無い漢字については、文脈や古辞書等によって、その訓を推定してゆくことの可能な例が少くないが、中には確実さの点で疑問を禁じ得ない例が有るので、今回の考察対象からは除くことにする。

さて、右に述べた完全付訓漢字及び部分付訓漢字を対象として、漢字と訓との関係を調べてみることにする。調べるに当たっては、その漢字と訓とが三巻本色葉字類抄(前田家本・黒川家本)、観智院本類聚名義抄に存するか、特に三巻本色葉字類抄において、その漢字がどのように扱われているか、即ち、ある訓の下に配列されている多くの漢字のうちで、該漢字は何番目に掲出されているか、あるいは、合

点が付せられているか等の諸点に注意してゆくことにしたい。

最初に完全付訓漢字について調べたところを掲げる。各用例の頭の数字は底本における所在行、()の数字は字類抄において、同一訓の下に配列されている漢字の数、○内の数字は右の漢字配列における該漢字の掲出順位、○の右肩の「\」は合点の付せられてゐることを示す。又、「K」は、それが黒川家本に拠るものであることを示す。――線は、それを付した語が考察対象であることを示す。

〔I〕 三巻本色葉字類抄に掲出されているもの

- 174 強 ^{アチカケニ} ① (3)
- 221 愍 ^{アヒミシ} (アハレフ) ③ (2)
- 15 對 ^{アヒ} 對 ^{アヒテ} ⑥ (45)
- 172 間 ^{アヒタ} ⑦ (9)
- 151 遍 ^{アヒナラフ} ① (29)
- 268 周 ^{アヒナラフ} ③ (29)
- 300 奇 ^{アヒナシメ} (アヤシ) ① (11)
- 372 顯 ^{アラハミ} (アラハス) ① (45)
- 367 昔 ^{イミヘ} ⑩ (10)
- 63 生 ^{ウレ} ① (3)
- 159 生 ^{ウミ} ① (3)
- 119 漆 ^{ウツシ} ① (1)
- 227 畏 ^{ヲチテ} ⑤ (13)
- 310 音 ^{ヲト} ① (2)
- 74 驚 ^{ヲロイテ} ① K
- 179 首 ^{カウ} ① (2)
- 224 影 ^{カゲ} ① (1)
- 194 鏤 ^{カエ}

- ④ (5)
- 268 顔 ^{カホ} ⑦ (2)
- 66 間 ^{キタモ} ① (13)
- 119
- 刊 ^{カク} ② K (20)
- 222 理 ^{アワリ} (コトハル) ⑦ (16)
- 61
- 志賀、郡 ^{シヤ} ⑦ (1)
- 230 匣籠 ^{アキボツ} ③ (12)
- 184 逆 ^{サカレ}
- ① (3)
- 205 指切 ^{サシ} ⑦ (17)
- 186 頭下 ^{アタ} ⑦ 其下
- ① (3)
- 121 沈 ^{シヅム} ⑦ (15)
- 69 變 ^{シガラフ} ② (18)
- 309 縛 ^{シバテ} ① (4)
- 22 躰 ^{スカタ} ⑤ (7)
- 75 住 ^{スミ} ⑦ (12)
- 342 錢 ^{セニ} ① (2)
- 279 虚 ^{ソラ} ② K (11)
- 364 空 ^{ソラ} ① K (11)
- 286 頓 ^{トキマエ} ⑦ K (21)
- 68 傳 ^{タテマツル} 奉 ^{タテマツラス} ① (13)
- 70 憑 ^{タヤム} ④ K (18)
- 61 貴 ^{タカシ} ② (14)
- 70 契 ^{チキテ} ① (3)
- 335 次 ^{ツキテ} ① K (51)
- 62 告 ^{ツギ} ① K (19)
- 259 露 ^{ツユ} ① K (1)
- 144 早 ^{トウ} ⑪ (36)
- 68 歳 ^{トシ} ② (13)
- 139 流 ^{ナカシ} (ナカレ
- ① K (13)
- 74 鍋 ^{ナベ} ① K (4)
- 234 逆 ^{サカレ} ① (11)
- 167
- 野 ^ノ ① K (1)
- 130 秤 ^{ハカリ} ① (3)
- 23 獄 ^{ヒトトシ} ① (2)
- 149 書 ^{ヒル} ① (3)
- 241 融 ^{ワレテ} ① K (10)
- 75 竇 ^{マコト} (マコト

- ① (54) 70 守 (1) (31) 62 所以 (1) (1)
- 72 故 (4) 113 若 (5) (12) 227 犯 (1) (17)
- 53 御橋 (1) (1) 259 着代 (4) (30) 138 余 (1)
- (餘 アマリ (1) (1) 67 172 嗅 (10) 臭 (11) 臭が当ると見る)

※次の例は掲出順位が明かでないので除く。

- 69 唐車 (唐皮カラカハ 唐菓子カラクタモノ) 175 何人 (何為ナニシニ、何周ナニ、ヨテカ、何以ナニヲモテカ)

〔II〕三巻本色葉字類抄に無くて類聚名義抄に掲出されて

- 108 209 兵 (イソハ) 19 326 倍 (イヨク) 62 石管 (ツ) 231 切伏 (フセツ) 259 伏 (フセテ) 108

〔III〕三巻本色葉字類抄、類聚名義抄共に掲出されて

- い ないもの
- 367 相 (アヒセテ) 235 弘田 (アヲ) 子増 (イヨク) 336 甘 (ウマキ) 117 持 (オカル) 257 持 (ヲキテ)

- 266 持 (ヲキタル) 384 御 (ヲハ□ケル) 318 思 (ヲホエス) 79 王 (オホヤケ) 221 臂 (カネ) 388 齒 (□ラヌ)
- 259 着 (代) (カ) 76 唱 (サガフ) 182 抜 (ヌク) 425 打 (ウツク) 291 戸 (ツマ) 185 膚 (カダ) 65
- 鯉 (フナ) 309 314 房 (ヘ) 230 団 (マキ) (籠) (カゴ) 287 除 (ヌカフ) 22 108 135 王 (ミカト)
- 77 212 唐 (モロコシ) 12 止 (トモ) 无 (ナシ) 62 其 (ソノ)

※△固有名詞▽

- 81 紀 (キ) 伊 (イ) 國 (クニ) 伊都御 (イドミ) 153 □ (金) □ (金) ウシ 國 (クニ) 77 惠果阿闍梨 (エカアセリ)
- 20 晋 (シノウ) 史 (シ) 弘 (コウ) 75 教待尚 (ケイテイジョウ) 和 (ワ) 212 利人 (リジン) 64 彌勒 (ミロク)
- 71 御尾明神 (ミオノミヤコ)
- ※※△宛字▽ 61 此青 (チキヨウ) 底 (テイ) (ハシ)

※及び※※の二項は参考までに掲げた。

次に部分付訓漢字について調べたところを掲げる。要領は前項に準じ、所在は代表例のみを示す。

〔I〕三巻本色葉字類抄に掲出されているもの

- 338 丙 (チ) ③ (6) 250 鬼 (オニ) ② (4) 370 各 (オノオノ) ①
- (1) 123 数 (カズ) ② (5) 254 皮 (カ) ハ ① (1) 104
- 國 (クニ) ① (3) 145 政 (セイ) リ 事 (コト) ① (15) 22 衣 (イ) モ ①
- (1) 51 験 (ケン) シ ④ (18) 138 衿 (エリ) テ (袖の誤りと

見る ①^K (8) 236 谷ニ ①^K (7) 363 カラクラ
 へ ① (8) 95 塵リ ① (6) 376 殿ノ ① (1)
 135 中カ ①^K (4) 145 後チ ①^K (8) 159 聖リ ① (1)
 2 144 免人ト 175 病人ト ① (5) 51 獨リ ① (1)
 19 129 水ツキハ ①^K (1) 398 乳母ト ①^K (3)
 29 物ノ ① (4) 149 夜ル ① (9) 173 鳥獸ノ
 ①^K (2) 44 一ツ ① (3) 13 云ク ⑥ (12)
 13 預カリ ① (1) 155 限リ ③ (3) 256 莊リ
 (カサル) ⑤ (14) 57 煙リ ①^K (3) 338 初メ
 ① (1) 462 當タリ ① (41) 216 相ハテ ③ (46)
 197 有ラム ① (8) 41 祈ラル ① (10) 144 云フ
 ⑥ (7) 8 入ラヌ ① (21) 444 失ハム ①^K (14)
 48 撰ヒ ④ (27) 140 送ラム ① (25) 143 思フニ
 ①^K (30) 226 隠ス ① (61) 238 語ル ① (16)

132 歸シ ⑤ (23) 23 返ス ① (23) 377 構ヘテ
 (カマウ) ① (12) 332 通フ ① (16) 265 云間
 1セ 249 間ク ① (13) 354 來レリ ① (10) 15 悔イ
 悲 ①^K (6) 203 下サム (クダ) ①^K (19) 336
 食フ ①^K (25) 368 競フ ⑥^K (8) 315 黒ハミ (ク
 ロシ) ①^K (28) 263 答フレハ ① (6) 343 棒ケ
 テ ① (5) 399 候ヒケル ① (7) 282 知リ ①
 (15) 129 沈ム ① (15) 144 捨テ ① (43)
 358 立テラル ①^K (32) 278 奉ル ①^K (13) 1 尊
 トカラレム (タフトシ) ①^K (14) 11 貴カリ給
 テ (タフトシ) ②^K (14) 143 貴ムヘキ (タフト
 フ) ②^K (14) 193 賜フ ②^K (19) 128 給フ ①^K (19)
 4 遣ス ①^K (5) 293 付キ ①^K (54) 47 造リ始ム
 ル ①^K (21) 68 傳 (コタ) 159 傳ヘサセム ①^K (10)

343 立留リテ (7) (12) 263 問ス (1) (11) 98 取リ

聚テ (1) (94) 240 成ル (1) (27) 9 流サレヌ (9)

ナカレ (1) (13) 186 咄リ下 (3) (7) 42 延ハ

デ (1) (32) 342 乘リ (1) (18) 130 量ル (1) (1)

36 残シテヘノコル (1) (14) 47 造リ始ムル (1)

(45) 44 放ツ (1) (11) 255 光ルヘヒカリ (1)

(10) 80 34メナトヘヒロシ (4) (22) 94 吹

キケレハ (1) (7) 302 隔テ (1) (10) 39 申ス

(1) (32) 49 倍ル (2) (23) 251 手迷ヒ (1) (12)

167 學ヒ往ク (1) (20) 190 導ヒケ (1) (12) 1 見

セテ 206 見ル (1) (56) 60 求メ往 (1) (26) 136 和

テ (1) (38) 342 遣ル (1) (6) 99 別レム (1) (7)

171 渡ル (2) (33) 46 拜ミ (1) (6) 254 納メテ

(2) (78) 65 居リ (1) (23) 251 明ウ (1) (2)

345 不審シ (1) (2) 256 疑シウ (ウタカフ (1) (K))

(14) 337 怖クテヘオソル (1) (51) 378 同ク

(1) (7) 133 多リケル (1) (20) 240 重シ (1) (2)

1 賢キ 407 賢コカリケル (1) (11) 325 難シ

(1) (41) 26 悲キ (1) (29) 7 清ク (2) (23)

65 委ク (1) (10) 147 嶮キ (1) (5) 307 驕キニ

(2) (17) 2 尊トキ子尊キ (1) (14) 391 近ク

(1) (31) 157 玄シ (28) (30) 370 長ク (2) (18)

8 并元キ 14 无シ (4) (16) 351 早ク (1) (9) 244

久ウ (1) (23) 141 廣ウ (1) (22) 24 深ク (1) (K)

(36) 121 安シ (2) (62) 6 劣ロキ (1) (8)

338 強クニ (1) (3) 249 大キナル (1) (77) 397

苦ルシケヘクルシフ (1) (12) 107 殊ニ (2) (

11) 190 慥ニ (1) (9) 253 平ラカ (1) (22)

21 遠カナル ④ (39) 106 玄カナル ② (39) 338

安ラカニ ② (62) 295 已ニ ② (4) 338 既ニ ①

(4) 11 即チ ① (18) 272 互ニ ① (16) 23

只ニ 100 只シ (タタ) (タタ) (タタ) ① (15) 365 然レハヘシカ

リ ③ (6) 149 往ク (ウ) (ウ) ③ (40) 343 何

電ソト、問ハ ① (11) 125 サ、候事 ① (7)

※何カ (何為イカ、セム) は掲出順位が明かでないの除く。

〔II〕三巻本色葉字類抄に無くして類聚名義抄に掲出されて

322 伏シ (フ) 49 見ユ (ミ) 181 我カ (ワ) 121 小シ (コ)

〔III〕三巻本色葉字類抄・類聚名義抄共に掲出されていないもの

2 思シテ (オモ) 125 思ユ (オモ) 8 其ノ (ソノ) 300 佛達チ (ブツ) 161 傳ハ (ツタ)

ラム 385 炬シテ (クモ) 19 愁キ給ケリ (ウレ) 46 王ト (ミカ) 408 帝

王ト (ミカ)

これを一覧して、①②の多いことに気付くのである。そこで、

(一) 同語でも異漢字表記はそれぞれを一として数える。

(二) 完全付訓漢字と部分付訓漢字との重複を避ける。ことにして集計すると次表の如くなる。

計	部分付訓	完全付訓	順位	
			第一・第二位	第三位以下
(一七〇)	(一七一)	(四七九)	二	三
(八四・六%)	(八七・七%)	(七七・八%)	六	六
一七	一	六	五	五
(九三・〇三%)	(九五・六五%)	(八七・三%)	二	二
六九七	四三六	二七七	八	八
(一〇〇%)	(一〇〇%)	(一〇〇%)	一	一
一四	一三	一三	一	一
(二〇%)	(一〇〇%)	(一〇〇%)	一	一

右表によれば、各語の表記に用いられた漢字は、三巻本色葉字類抄に於て第一・二位に掲出されているものが約八五%を占め、それに「要文」であることと示すと見られる合点の施された例を加えると、約九三%という高い率を占めていることがわかる。以上の方法は峰岸明氏に倣ったところであるが、峰岸氏は、今昔物語集及び高山寺本古往來の副詞の表記に用いられた漢字が「日常常用の漢字」、「日

常実用作文のために使用される当時の日常常用漢字の特徴を具備していたと推測される」と述べられた。⁽⁶⁾この点は、打聞集所用の漢字（完全付訓漢字・部分付訓漢字という限られた範囲内でのことではあるが）に於ても共通するもののように考えられるのである。

ここで、ほぼ同時期の資料間で、副詞表記の漢字について、日常常用漢字使用率を比較してみようと思ふ。資料は次に掲る。

今昔物語集

注(6)所掲

高山寺本古往来

注(2)所掲

打聞集

小稿の資料から次の語を抜き出した。

強 ^{アキカチ} 普 ^{アマナク} 周 ^{アマナク} 顯 ^{アラニ} 擧 ^{ヒラク} 頓 ^{多キチ} 露 ^{ツユ}
 早 ^{トク} 實 ^{マコトニ} 殊 ^{コト} 慥 ^{たしむ} 已 ^{まで} 既 ^{まで} 即 ^{すなはち}
 互 ^{たがひ} 尺 ^{たん} 獨 ^{ひと} リ

打聞集の数値は、「全く付訓の無い漢字」にまで範囲を拡げれば、幾らかの異動を避け得ないであろうが、おそらく、表の示すごとく、三者の中で高山寺本古往来の日常常用漢字使用率が最も高く、今昔物語集と打聞集とは相似たところが有る、というこ

とになるのであろう。

打聞集	古往来	今昔	順位		
			第一	第二	第三
一四 (八二・三五%)	六〇 (九〇・九%)	一〇一 (八六・三%)	二	二	二
一	四	四	付合点の	下の	第三の
一五 (八八・二四%)	六四 (九六・九七%)	一〇五 (八九・七%)	小計	其他	計
二 (二・七六%)	二 (三・〇三%)	二 (二・〇三%)			
一七 (一〇〇%)	六六 (一〇〇%)	一七 (一〇〇%)			

第二節 一語多漢字表記の検討

打聞集には、同語を表すのに異つた二つ又はそれ以上の漢字を用いている所謂一語多漢字表記が有る。本節では、それらについて検討を加えてゆくことにしたい。掲出漢字の下の()に包んだ数字は、本集における用例数を、例文末の()は所在行を示す。

[I] 意義・用法等の相補関係にある場合
 アハス(合・相)

- 合(2)、イヒ合(1)、云合(1)、参合(1)
 1) 二つ以上のものを併せて一つにする。
 ○ 止无伴僧四人僧都合五人ナ四見ル(37)

相アヒテ(一) 両者を対抗させる。闘わせる。

○我持前ノ法ハ音イミヤヨリ術鏡ヘヲシテ人ニアカメラル、物也。然ハ此ノ度只相アヒテテ御魔スヘシ。

(367) ※今昔の類似説話では「合レ」(四 35 12) アラス(否定辞「非レ」と「不レ」)

非有ニ(一)、非ス(4)、非ヌ(2)、非ネト(一)

三卷本色葉字類抄(前田家本)へ下三六ウ5)に「非アラス 不説府尾反 匪巳上同」とあるが、本集では、「アラス府尾反」に「不レ」を用いた例が無く、「アラズレ」以外の否定に「非レ」を用いた例も無い。

オコス(起・發)

起(一)

○兵起イコサテ(108)

發(一)

○アツノ心ヲ發テハ(134)

「起兵レ」(戦国魏策)、「發心レ」(漢書・涅槃經)等の熟語が背景に在るか。

カク(此・是)

此(一)

○此レソ、仏タニ子ヲ思給フ道ハ他人ニハ異也。

是(222)

○如是堂寺造テ(6)

右を始め、すべて「如是レ」である。(23 52 55 186 193 304 311 423)

スベテ(惣・凡)

惣(一) トータル。肯定表現に用いられている。

○惣数タル数ヲ以テ象重サニカソヘアテ、(30)

凡(2) 打消語と呼応している。

○仏経凡不見給所ナシ(308)

○ト書タルヲ見テ後凡思ヲホエス(318)

※今昔の類似説話では右三例とも「惣レ」。(四 40/12 四 81/15・82/8)

タマフ(賜・給)

賜(5) 本動詞のみで、恩賜の意に限られている。

○宣旨下サレテ獄ニ賜ツ(24) (他に194 195 195 277)

給(四段活用143 下二段活用2) 補助動詞のみである。高山寺本古往来に共通する。(注 2、632頁)

○貴カラセ給ハキ也(363)

○サアラム事ヲ不見給トテ(217)
トシ(年・歳)

年(9) 年中(1) 去年(1) 年來(3)
歳(1)

年齢・年月の場合とも「とし」には「年」を用い、「歳」は助数詞に限って用いることにしていたようである。

○年八十許の老僧(16)

○歳罷老テ(68) *筆者の用字法に反するので仮名を付けたか。

○百余歳(64) 三歳(239) 十五歳(240)

ナガシ(長・永)

永(1) 時間的の隔りに用いる。

○年來イトミツル心永失又(135)

長(1) 空間的の距離に用いる。

○二色ノアクヲ長ク立テ(370)

*今昔の類似説話においても、二例とも同様である。(四 402・2 因 55・15)

III 意義・用法等の相互に重なり合う関係にある場合

合

アフ(合・相・對)

相(4) 合(1)

共に好ましくない目に遭遇したことを表す場合に用いてある。

○惡王ニ相テ(26)

○合破滅之使(298)

アヒ・アヒテ 對 (4) 出對(1)

人に面と向いあう。ばったり出会うことを表す場合に用いてある。

○人里ニ出給ヘルニ人對タリ(324)

○此ノ和尚ニ對ニ天竺ヨリ渡僧(15)

アマネシ(遍・周)

アマネク 遍(2) 周(2)

差異が認められない。

○空頓クモリテ世界雨遍降ヌ(332)

○此居並タル女共ノ顔コトニマホリワタヌ周(アマネク)

顔ヲマホリテ(268)

*今昔の類似説話では「遍」(四 347・2)

アラハス(顯・見)

顯(3) 見(1)

○其心ヲ顯カタメニ病人形ヲ見ナル(189)

*今昔の類似説話では「病人ノ形ヲ現ゼリ」とある。(六 66・14) 「見」は「現」の省文か。

三卷本色彙字類抄（前田家本）によれば、「見」は「アラハス」の第三七位に掲出され、合点は無い。「現」は第五位で合点は無い。イタル（至・到）

至（4） 歸至（1） 到（1） 以到（1）
 ○墨ノモトニ水至(130)

○上件所ニ到有也（中略）彼所到人出事難シ（324）
 325

高山寺本古往來に見られるような用法差は無
 いようである。注2、620頁参照。

イへ（家・屋）
 家（3） 御家（1） 屋（7）

「屋」七例をすべて「イヘ」と訓むには問題
 が有る。「ヤレ」とも訓めるからである。三卷
 本色彙字類抄によれば、「屋」は「イヘ」の
 所には掲出されず、「ヤレ」の第一位に掲出さ
 れている。類聚名義抄にも「イヘ」は無く、「
 ヤレ」である。さればと云って、すべてを「
 ヤレ」と訓むことも文脈上無理である。岩波
 古語辞典「イヘ」の項に「家族の住むとこ
 ろ、家庭・家族・家柄・家系をいうのが原義。
 類義語「（屋）は、家の建物だけをいう」と

説く。この区別は古事記に於ても認められる
 由、小林先生からお教えいただいた。いま、
 今昔に類似説話が有り、且、類似表現の有る
 ものについて、両者を比較してみよう。打間
 集の七例は次のとおりである。

○土室ヲ掘テ家ノ内ニ隱居ツ。屋ノ人ニタニ殊ニ
 不知ス (106, 107)
 ○朝夕ノ孝ヲ送メムカタ屋ノ内ニ室ヲ造テ居テ候
 也 (140)

○一門アリ（中略）一人長者家也 (303)

○後立テ往因見ハ種々家造人多住タリ（中略）後
 ノ方ナル屋ヲヨリテ間ハ (307, 308)

○祖屋ニ歸至 (348)

○宮地ノイヤマスカ屋ヲ造寺 (403)

○大原大玄當テロニ三間屋有り (421)

次の上段に打間集、下段に今昔を置き対照し
 てみよう。

- a 家 | 家 (国 400 11)
- b 屋 | 家 (国 400 11)
- c 屋 | 家 (国 402 7)
- d 家 | 家 (国 81 8)
- e 家 | 屋共 (国 81 13)

f 屋 | 屋 (同右)

g 屋 | 家 (因 203・3)

h 屋 | 家 (因 238・13)

i 屋 | 家 (因 387・11)

これを文脈上より検討してみると、b・g は「家」とあるべく、hは「屋」のままでもよいであろうが、「家」が一層小さくわかるべく、e・fはそのままでよいかと思われるが、fは「屋」よりも「家」の方がeとの調和という点で一層小さく思われる。又、c・iは「屋」のままでも不審は無い。「屋」を「イヘ」とも訓んだことは、櫻葉集、文明本・易林本各節用集等により知られ、打聞集においても、「ヤレ」「イヘ」両様に訓まれることが有ったのではないかと考えられる。

イヨイヨ (増・倍)

増 (イ)

○聞テ増 賢キワサシツルト思ヘキ也 (3)

※今昔「聞テ弥」殊勝ノ善根修トテリ可思キ也

ル (因 58・4)

倍 (イ)

○其ヨリ倍 逃ノキテ王城方ニ至テ (326) 他に (19)

※今昔「其ヨリ弥」逃ケ去テ (因 83・2) 用法に差が認められない。三卷本千葉字類抄 (前田家本) には「弥イヨ、」を第一位に掲出し、合点を付してある。

ウチ (内・中)

内 (16) 中 (2)

○粉ヲ宮ノ中ニヒマナクマキテム。サラハ身ヲ陰ス物ナリトモ足カタノ付テイカム所ハシルク顯ナムトテ粉ヲ召テ宮ノ内ニユキノ降タルカ様ニマキツ (228・230)

本集には「内チ」(38)、^イ「中カ」(35)の表記例が有るから、「内」をウチ、「中」をナカと訓んだことは疑い余地が無い。又、すべての用例に当たってみるのに、一応は意義上の區別をなされているようである。さりとて、右の例の「中」をナカと訓んで「宮ノ内」と別語とするのは機械的に過ぎよう。又、ナカと訓んでウチの意に解することも可能であろうが、三卷本千葉字類抄 (黒川家本) に「中ウチ 裏同 内同 (略) (中 51・オ 6) 中ナカ 裏同 (略) (中 三五ウ 1) とあること

にも照してウチと訓むことにした。詳細は別稿に譲る。尚、法華百座聞書抄總索引に補註(146頁)参照

オモフ(思・念)

思(4) 思ヒ顯(1) 思得(4) 不得思

(1) 思得カタク(1) 思とニ(1)

念(1)

○東京ニ念女以、時ヲハシケルニ(384)

※古本説話集の類似説話では「東の京に思(

小)女持ちて(第五十一、六九才)とある。

一般には「思」を、男女の情にのみ「念」を用いたか。尚、注2、625頁参照。

カクス(隠・陰)

隠(3) 隠ヲフ(1) 隠居ツ(1) (隠レ

菴(1))

○形ヲ隠ス寮也ケリ(226)

陰(1)

○サラハ身ヲ陰ス物ナリトモ(227)

※今昔では「然レバ身ヲ隠ス者也ト云モト

(四307)とある。

一般には「隠」を用いたのであろう。三巻本

色葉字類抄(前田家本)(上一〇四下)には「隠カクス」を第一位に合点を付して掲出し、隠カクル

「陰」は第三位に掲出され、合点は無い。

カタアシ(片足・半足)

○草鞋片足許アリテ眞躰ハ无シ(4)

○草鞋イノ半足ヲハキテ早ニ天竺サマニ参ハ返

※今昔の類似説話(因〇三)では、いずれにも「片足」と表記されている。

意義用法の差は認められない。避板法を考慮すべきか。

カタル(語・談)

語(8) 談(1) 談アハセ(1)

○河中船ウチ返テ死トナム譚ケルヲ聞テ祖屋

ニ歸至此録定ニカヘツル由語ト思程ニ(348 349)

※今昔の類似説話(因〇十三)では、いずれ

にも「語」を用いている。三巻本色葉字類抄(前田家本)(上一〇四下)には、「語

カタル」を第一位、「談」を第二位に掲げ、いずれにも合点を付している。

カハ(川・河)

川(3) 河(1) 河中(1)

○河中テ船ウチ返テ死 (348)

○錢、川ニ落入ヲ見テ (351)

カヘス(返・歸・反)

返(2) 返得(1) 返エム(1) 返ヲコ

セ(1) 返立(1) ウチ返(1) 召返(1)

1) 歸遣(1) 反(1)

○昔尾張國ニ弘田返立ル翁有アリ (235)

○祖云様ナトテ此録ヲハ返ヲコセタルソト問子

答録返奉ス (349)

○サテ後家重サイクラナム有ト書テ歸シ遣ツ (32)

意義の別により整理すると次表のごとくなる。

意義は「岩波古語辞典」による。

同一のもの位置・状態を以前とは逆にする	返	歸
物事や人を、もの所の状態にもとす	○	○

一般に「返」を両義に用いている。

「反」は副詞の漢字表記なので特殊と見る。

○平等香呂ヲ取テ反念居 (378)

カヘル(歸・返)

歸(16) 歸イカテ(1) 歸至(1) 歸出

(1) 歸坐(1) 歸去(1) 歸參(3)

歸了(1) 取歸(1) 走歸(2) 罷歸(1)

1) 返(4)

○駿コカリケル國ニアタノ心ヲ發テハ返テ打得

レナム (134)

○ト云ケレハ使返テ其由奏時ニ (15)

○本ノ唐ニ歸ニケリ (212)

意義の別により整理すると次表のごとくなる。

意義は「岩波古語辞典」による。

同一のもの位置・状態を以前とは逆になる	歸	返
人や物事かもの所の状態にもとす	○	○

キヨシ(清・淨)

清(2) 淨(2)

○夜半行水清衣着入持(佛)堂 (422)

○水沐淨衣ヲ著ナム(略) (96)

三卷本色葉字類抄(前田家本)へ下六〇オ

には、「淨キヨシ又、ヨム」を第一位に、「清又、セイ」

を第二位にそれぞれ合点を付して掲出してある。

クフ(食・食)

食(18) 食ステタルヲ(1) 食物(2)

食(2) 食チラシ(1) 食散(1)

○牛牝花ヲ食フ(336)

○イタウ酔酒ヲ食テ死タル様ニ酔シ伏ツ(258)

一般には「食」を用いている。尚、三卷本色

常字類抄(黒川家本)(中七四ウ)には、「

食^{クラフ}_{クラフ}」を第一位、「食」を第九位に掲出

している。

コノ(此・是)

此(105) 此ノ(5) 此ノコロ(1) 此ノ

度(1) 此度(1) 是(1)

○サレハ是加持セシメ給(44)

※宇治拾遺物語の類似説話では、「この加持

し給(レ(一四二))とある。

一般には「此」を用いている。

コレ(此・是)

此(13) 此レ(1) 之(3) 是(6)

○此ハタレカ御マシソ(21)

○是ハ何物イツレノ國ヨリ來ルソ(20)

○此ヲ盗テホテタテマツル(48)

○國賜ヘクハ是ヲ奉テム(277)

○一宿見之(422)

○此ヨリ後御修法行之(333)

○傳ヘ得タテマツレル所ノ心経是也(191)

○此カ祖子定ヨ(108)

○此ヨリ後御修法行之(333)

○夜々鬼來取食依之人怖テ鐘ヲ付不ス成ヌ(292)

各語の用法を分類整理すると、次表のごとく
なる。数字は用例数を示す。

之	是	此	
	4	7	主語
1	1	4	語目的
1			陳述的用法
	1		述語法
		1	連格
		2	後
1			ニヨリ
3	6	14	計

「之」が三例とも漢文体語序を取っている
所に注意されるが、総じて、高山寺本古往未
ほどには明確な区別がつかない。注2、614頁
参照。

シカルニ(然・而)

然(1) 然(1) 而(1)

○青龍寺金堂火付キ然ニ日本方ヨリ雨風頓吹テ

(293)

○日本國ヨリ佛法學タメニ渡也。而如是礼相也

308

※今昔の類似説話では「然ルニ仏法ヲヒロボ

ス世ニ會テ」(因 81・9)とある。

スデニ(已・既)

已ニ(2) 已(1) 既ニ(1)

○已ニ佛法絶ヌルカ如シ(245) 他に(248 249)

○此、方既ニ通トスルニ穴ニ満ヌ(338)

※今昔の類似説話では「穴ヲ出ルニ頭ハ既ニ

出ト云モ下身・穴ニ満テ出ル事ヲ不得ズ」

(因 399・2)とある。本例を「方免」(方面

)と読む説が有るが採らない。「スデニ」

；ムトスルニ」の表現型は、左の如く、「

已」にもある。

○已付ハテムトスル程ニ(248)

「已」が普通であつたらしく見え、その点、

高山寺本古往来に通ずる。注2、655頁参照。

スナハチ(即・仍)

即チ(一) 仍(一)

○遣テ使ヲ召シム即チ参ヌ(リ)

○入テ戸クテ、御□□一人コトネリ童ハ例入御

戸柱本ニ典居給ヌ(38)

古記録等和文化漢文にあつては、「仍」は、文

頭に接続詞「ヨリテ」として用いられるのが

普通であるが、ここは文中の例であり、「ヨ

リテ」は適合しない。「仍」を「スナハチ」

と読み得ることは、三巻本色葉字類抄(前田

家本)(下一九オ)を初め、訓点資料によ

つて確かめられる。詳細は別稿に譲る。

ソノ(其・介)

其ノ(一) 其ノ(八) 其(57) 介(5)

○其ノ時(26) 其時(44) 其所以(62)

其ノ預カリ(13) 其ノ國(25) 其後(9)

其由(31) 其寺(47) ……以下略。

○介時(47 133 137 294 381)

「介」は「介時」の例のみである。「其」が

広く、「介」は「其」に包まれる関係にある。

ソラ(空・虚)

空(一) 空(10) 虚(一) 虚言(4)

○先年ニ天ノ虚ニ登テ有ヨリモイハテ(279)

一般には「空」を用い、「虚」は特例と見ら

れる。「虚言」は別。但、三巻本色葉字類抄

(黒川家本)(中一五ウ)には、「空ソラ」

を第一位、「虚空也」を第二位に掲出して

る。

タテマツル（奉・進）

奉へ実賢動詞（7） 進（3）

○花香奉テ祈ニ七日過ヌ（41）

○消息ヲ奉テ大師許（292）

○又同様ニ刊タル木漆ヌリタルヲ本末定テトテ

又進リ（19）

○又蒙ヲ進テコレク重ノ數スカンベテ進ト申タ
レハ（23）

※今昔の類似説話では、a「奉レリ」(国400)

15)、c「奉レ」(国401/4)とあり、bは

本文を異にして「遣テ」とある。

「遣」は三例とも第七話に集中しているが、

「奉」との用法差は認め難いようである。高

山寺本古往来における「遣」の用法とも異なる

点がある。注2、631頁参照。

尚、補助動詞「タテマツル」には専ら「奉」

が用いられている。

○具シ奉テネトモ（38）

○安持シ奉給ヘリ（47）

トコロ（所・處）

ハ実賢名詞（所（37） 處（1））

○道ニ流砂ト去所ニ年八十許ノ老僧ノ腰柱カタル

草鞋イノ半足ヲハキテ（16）

○山フトコロヲスキ往間人ハルカニタエタル所

アリ（172）

○暨安隱處ニカクレテ有（304）

ハ形式名詞（所（5） 處（2））

ハトコロノ）

○傳へ得タテマツレル所ノ心経（191）

○我持所ノ法（361）

ハトコロニ）

○流レタル所ニ行テ尋所ニ其ノ預カリノ云ク（3）

○幕途セムトテスル處ニ草鞋片足許アリテ鼻跡

ハ无シ（14）

ハトコロナリ）

○不得思處也（296）

以上、高山寺本古往来とは異なる点がある。注

2、608頁参照。

トコロトコロ（所・處）

所（4） 處（2）

○天竺ニ渡所ニ往テ仏法ヲ學ヒ往ク（167）

○カ、ル程ハ此ニ有ト思シテ處ニ行給ニ（308）

ナシ（无・無）

无（20） 无礼（1） 有元（1） 无益事（1）

止无(6) 止事无(6) 極无シ(1) 限
り无シ(2) 限无シ(5) 限无(2) 无
限(1) 無本意(1) 無限(1) 無下 =
(1)

○徳房ヲ見レハ人モ无シ(64)

○ワカミ一人思テアラムハ本意无キ事ニコソ(62)

○王無本意思テ(8)

一般に「无」を用い、「無」は極めて少い。
用法差は認め難い。高山寺本古往來の「无」
無」の用法に通ずる。注2、64頁参照。

トホシ(遠・玄)

遠(2) 玄シ(1)

○往未モ遠(59)

○往未ノ道ハルカニ玄シ(157)

※後者は、今昔の類似説話では「行ク末ノ道
遙ニ遠シ」(因63・9)とある。

三卷本色葉字類抄(前田家本)(上五九ウ)
には「遠トヲシ」を第一位に掲げ、「玄」は
第二八位に掲出してあり合点も無い。あるい
は避板法を考慮すべきか。

ニハカニ(俄・頓)

俄(2) 頓(4)

○雲空ニ満チカキ闇テ雨俄ニウチコホス様ニ降
ヌ(58) 他に(358)

○然ニ日本方ヨリ雨風頓吹テ火消(293)

※今昔の類似説話では「而ルニ母寅ノ方ヨリ
俄ニ大ナル雨降り来テ火ヲ消テ」(土86、
13)とある。

○投戎行スル日頓延引有ケリ(295)

※宇治拾遺物語の類似説話では、「座主の出
仕を相待リ所に途中より俄に歸給へば」
(一三九)とある。

○戒壇門風不吹頓倒(296)

※宇治拾遺物語の類似説話では、「未の時斗
に大風吹テ南門俄に倒れぬ」(一三九)
とある。

○ト答程空頓クモリテ世界雨遍降ヌ(332)

※今昔の類似説話では、「而ル間、俄ニ空陰
ヲ成亥ノ方ヨリ黒キ雲出来テ、雨降ル事、
世界ニ昏普シ」(土334・15)とある。

三卷本色葉字類抄(前田家本)(上三九ウ)
には、「俄ニハカニ」を第一位、「頓」を第
二位に掲出し、いずれも合点が付してある。
ノボル(登・上・昇)

登(7) 登立(1) 上(2) 昇(1)

○ 熏(煙) 空ニ登^a 等方ノ仏舍利放光ヲ空ニ上^b

經論モ同ク仏舍利ニ昇^cシテ空登^d (377, 378)

※ 今昔の類似説話では、^a「昇^e」、^b「昇^f」

給^g、^c「昇^h」給ⁱテ虚空ニ在^jマス (因

56, 9) とあつて、「昇^k」で統一されている。

打聞集は、「登^l」上^m「登ⁿ」という避板法か。

○ 仏ノ切利天ニ昇^o給^pル程 (146)

※ 今昔の類似説話でも同じく「昇^q」 (因 62)

8)

ハジム(始・初)

始(1) 書始メス(1) 造^rリ始ムル(1)

初(3)

○ 今始^sタル事ニモ非ス (139)

○ 種々御祈^tラレテ殿^uハモ騷^v給^wヒケリ (401)

○ 我立^x所ノ道ヲ帝王ヨリ初^yメテ衆人ノ止事无物

ニシ給^zヌルニ (358)

※ 今昔の類似説話では、^a「^{aa}」(因 336, 17)、^b「^{bb}」

(因 54, 10) とともに「始^{cc}」とする。

用法差を強いてあげれば、単純語としては「

初^{dd}」を主として用い、複合語には「始^{ee}」を用

いるということになろう。高山寺本古往来は

「始^{ff}」のみを用いている。

ハルカナリ(玄・遠)

玄(5) 遠(1)

○ 広^{gg}野ノ、玄^{hh}カニ遠ⁱⁱヲ往^{jj} (48)

○ 佛法傳^{kk}ムリ爲ニ遠^{ll}カナ天竺ヨリ來也 (2)

三卷本色々字類抄(前田家本)「上ニ九ウ」

には「玄^{mm}」を第二位に合点を付して掲出し、

「遠ⁿⁿ」は第四位で合点が無い。

フス(臥・伏)

△ 四段活用 √ 臥(2) 伏(2)

△ 下ニ段活用 √ 臥(2) 伏(1) 切^{oo}伏^{pp}(1)

切^{qq}伏^{rr}ケレハ(1) 醉^{ss}ニ伏^{tt}ツ(1)

△ 四段活用の例 √

○ 我ヲ助^{uu}給^{vv}ヘト念^{ww}シテ臥^{xx}ルニ尺迦佛丈六の軀ニ

紫^{yy}黄^{zz}金^{aa}之^{bb}光^{cc}ヲ放^{dd}テ (27)

○ キサキノ御^{ee}モノスソヲヒキカツキテ伏^{ff}シ給^{gg}テ

多^{hh}願ⁱⁱヲ立^{jj}給^{kk}フケニア有^{ll}ム (232)

※ 今昔の類似説話では「^{mm}」(因 308, 1) とある。

被ⁿⁿギテ臥^{oo}シ給^{pp}テ (因 308, 1) とある。

△ 下ニ段活用の例 √

○ 山中ノ中ハ平ククテヲ臥^{qq}タル様ニテ (86)

※ 今昔の類字説話でも同字。(因 106, 10)

○此男ヲカキテカク粧タル樓上ニ升テ登テ
伏^レテ装束着代^キテ臥^スタレトモイタウ醉ニタレハ
露不知⁽²⁵⁹⁾

※今昔の類似説話では「窟ニ搔テ彼ノ飜レル
様ノ上ニ將上^ラ臥セツ。亦、其ノ人ニモ微
妙ノ衣服共ヲ着セ、花鬘・璽珞ヲ懸テ臥^リ
雖然モ喜ノ醉^ルレ露ヲ知ル事无シ」(因346
16)とある。

用法差が明かでない。
ホル(掘・堀・窟)

掘(一) 掘入(一) 堀(一) 窟(一)

○土室ヲ掘テ家ノ角ニ隠居^ツ(106)

○掘^スルニ三四尺マテ无五六尺許窟^ハ一尺許ナル

銅ノ箱ヲ掘入^ッ(87)

※「窟」はあるいは「アナホリ」と訓むべき
か。

三卷本色々字類抄(前田家本)(上四六オ)
には、「掘・ホル・堀」を第一、二位に掲げ、第
九位に「窟」を掲出している。又、同
じく(下ニ五オ)には「窟^同又アナホリ」ともある。
a b cは避板法を考慮すべきか。
若骨反

マウス(実質動詞)(申・啓)

申(61) 申(サク)(ヘク) 申出テ(一)

○驚^ラキナカ其由ヲ王ニ申ケレハ(31)

○サレハ其由ヲ啓^ルヘキ也(14) [王 ↑ 使者]

「」に包まれたものは、上段が「申」「啓」
の受手を、下段が爲手を示す。「啓」はただ
一例のみでは「まきりしないが、「申」との間
に用法差を認め難いようである。

マガル(枉・曲)

枉(一) 曲(一)

○年八十許ノ老僧ノ腰枉^{カル}草鞋イノ半足ヲハ
キテ(16)

○曲臂延ハ、タトナリテ足又(44)

マコト(實・眞)

實(一) 眞(一)

○實ノ功德ハ(67)

※今昔の類似説話でも同字。(因58・11)

○汝ハ眞ノ潔聖ナリケリ(159)

※今昔の類似説話では「汝分実ノ清浄・眞直
ノ聖人也」(因66・14)とある。

三卷本色葉字類抄（黒川家本）（中九一オ）
 では、「實神質反」を第一位に、「真」を第
 三位に掲出してゐる。

モノ（実質名詞）（物・着）

物（24） 戒着（1） 使者（1）

○「物」打次の場合に用いられてゐる。

正体不明の現象 29 101 209

鬼 248 249 253 387 388

人間をはじめ生命有る存在 286

モノ云う 268 269 283 313 315 316 316 316 320 320

モノおほえず 387

モノ見えず 93 315 319

食物

一般に広く

○人間をも含めて、存在はすべて「物」で表さ
 れてゐるが、熟語に限って「着」が用いられ
 てゐる。

戒着集トレ歸了（295） 分使者堂塔ヤ（297）

又、モノドモについて「着」が一例（193）

「物共」七例（150 194 228 231 310 371 386）となつてい
 る。

ユク（行・往）

行（4） 往（14） スキ往（2） ツカヒ往

（1） 學ヒ往（1） 求メ往（1） 求往（1）

○後立テ往見ハ（中略）カ、ル程ハ此ニ有ト
 思シテ處々行給ニ仏経凡不見給所ナシ（306 307）

用法差は無く、「往」が主として用いられて
 いる。高山寺本古往来では、「往」のみ。

ユ正（所以・故）

所以（1） 故（2）

○井ハ一ナレトモ名ハ三井トナム申ス其所以ハ
 三代之王ノ生給ルウヲ湯クミクレハ三井ト申
 ナリ（62）

※今昔の類似説話では「大師、其故ヲ問フシ
 （111・5）とある。

○其日未時許戒壇門風不吹頓倒着人々其故知云
 （296）

用法差は認め難いようである。

ヨ口コブ（悦・喜）

悦（7） 喜（1） 他に名詞「悦」（3）が
 有る。

○王悦ヲ往テ見給ニ（5）

○(道丈法師)悦ナカラ楼ニ登テ(297)

○一本檜中穴ル方マタニ五古ウチ立テ喜悲事
限元(87)

一般には「悦」を用い、「喜悲」という対語
に限り「喜」を用いている。高山寺本古往來
に似る。尚、今昔では、類似説話に関する限
り「喜」に統一されている。「悦」の所在は
右例以外では、(11 239 302 326 355)である。三卷
本紅葉字類抄(前田家本)(上一一五ノ)に
は、「悦ヨロコビ」を第一位、「喜」を第四
位に掲出し、いずれにも合点が付してある。

ヲガム(拜・礼)

拜(一) 礼(三)

○丸白玉アリツボノ内ヨリ白光ヲ放ツ玉ト拜ミ
貴カリ給テ(46)

○帝王泣啼立座ヲ礼給フ(87)

用法差を認め難い。三卷本紅葉字類抄(黒川
家本)(中六五ウ)には、「拜博カカム」を第
一位に、「礼」を第五位に掲げているが、黒
川家本には合点が無いから、判断資料として
は弱い。

【III】分布状態に注意を要する例

一語多漢字表記の中には、その分布に際立った様
相を見せる例が有り、それが何を意味するかについ
て考えねばならないようである。

○カウヤには「首」と「頭」とが用いられているが
分布を調べると、「首」は(179 226)に見え、一方
「頭」は(250 339 340 394)に見える。即ち、打聞集の
本文は全部で427行であるから、前半は「首」、後
半は「頭」なのである。

○カクには「繫」「懸」が用いられているが、「繫
」は(98)のみで、「懸」は(130 257 313 354 391)に見え
る。

○カナへには「鑊」「鍋」が用いられているが、「
鑊」は(194)のみで、「鍋」は(194 198 198)に見え、
相互に交錯していない。

○スミヤカニには「早」は「速」が用いられてい
るが、「早」は(16)のみで、「速」は(46 180
194 218 302 368)に見える。

○タフトシには「尊」「貴」が用いられているが、
「尊」は(35)、「貴」はそれ以後一五例をか
ぞえる。明らかに表記上の基準に変更の有った事

を示すものようである。

○タフトガルには「尊」が用いられているが「算」は(一)のみであつて、「貴」が(114636)に見える。タフトシと併せて見れば、第一話の始めの五行までは「尊」、それ以後は「貴」を用いるという、基準の変更が窺える。

○ハジメへ名詞には、「始」が用いられているが、「始」は(7223)に、「初」は(338391)にという使い分けがなされていて、互に交錯してはいない。

○モツへ実動詞には、「持」が用いられているが、「持」は(5756)、「以」はそれ以後八例をかぞえる。これも途中で基準の変更のあつたことを窺わせる。

○モノドモには、「着」が用いられているが、その内「着」は(193)のみであり、それ以後は「物」が「入」し、「物」のいすれを表すのにも用いられ、七例をかぞえる。

○キルには、「坐」が用いられているが、その内「坐」は(54)のみで、それ以後は「居」が用いられ八例をかぞえる。

右に述べた如く、一語多漢字表記の中には、二つ

の異つた漢字が相互に交錯することなく、前後に使い分けられている例が存する。表記上の基準が途中で変更されたものらしく察せられるが、本節[II]に掲げた多くの一語多漢字表記例に比べれば、これらは部分的、且、非体系的であり、一方が日常常用字、他は非日常常用字であるという訳でもない。かかる用字上の変更が何故になされたかについては、尙後考に俟ちたい。

一方、中には、二種の漢字表記が交錯して表れる例もある。即ち、「ミカド」には「王」「帝王」が用いられているが、これは交錯している。考察してみるとのに、「王」(四八例)で統一するつもりではなかつたか。第一話から第二話まで、広く「王」を用い、第一話の「宇多院ノ帝王」(208)を「帝王」の初出として、天皇には「帝王」(一九例)を用いる傾向が出てくる。(但し、「村上天王」(27)は例外であり、又、逆は必ずしも成立しない。)因みに、今昔物語集では、固有名詞には「天皇」を用いて統一されている。(但し、「始皇」は「國王」で統一されている。

むすび

以上繰々述べてきた所を纏めると次の如くなる。

- 一、付訓漢字について調べたところによれば、その殆どが日常の常用漢字であると考えられる。これは、高山寺本古往来に共通する。同時に、この事實は、全く訓の付されていない漢字を訓む際の指針を示唆するものでもあると考えられる。
 - 二、打聞集には一語多漢字表記が多く認められる。これは、高山寺本古往来が一語一漢字表記に固定しているのに比べて際立った差異である。
 - 三、打聞集の漢字表記は、未だ整理されていない感があり、高山寺本古往来の有する規範性と大きく異なる。
 - 四、今昔物語集所収の類似説話と比べてみた場合、漢字表記については、打聞集よりも今昔物語集の方がよく整理されているようである。
- (注)
- 1 「國語史料としての高山寺本古往来」(『高山寺資料叢書第二冊高山寺本古往来表白集』所収)
 - 2 「高山寺本古往来における漢字の用法について」(『同右書』所収)

3 注2の用語を借用する。「部分付訓漢字」「全く付訓の無い漢字」も同様。

4 語例のうち「鳥獸」は、字類抄及び名義抄に依り「ケモノ」と訓んだが、「鳥獸」という

運語になると、宇津保物語の全五例、法華百座

聞書抄の一例等「トリケガモノ」であるので、

本集もそのように訓むべきかも知れないが、姑

く「ケモノ」としておく。次に、「149往」

について付記する。本集の仮名書き例はすべて

「イ」であるが、漢字書きの「往」は姑く「

ユク」としておく。(小林先生の御教示)

5 こまついでお「聲點の分布とその機能(Ⅰ)」

前田家蔵三巻本「色葉字類抄」に「(國語國

文第三五巻七號)参照。

6 「今昔物語集における漢字の用法に關する一試

論」副詞の漢字表記を中心に「(『國語學』84

)及び注2参照。

7 89拙稿「打聞集」私註」(『高知大学學術研究

報告第二六卷人文科學三號)参照。

10 今昔物語集の類似説話においては、人間には「

者」、人間以外には「物」を用いて區別されて

いる。
△了√(53, 3, 1)